信仰の現場

～すっとこどっこいにヨロシク～

ナンシー関

時代を笑い飛ばす術（すべ）を、もう一度

ナンシー関さん

に教わろう。

令和の「推し文化」の到来さえも射貫くナンシー関の

「唯一」のルポルタージュを、

新装復刊！

信仰の現場

～すっとこどっこいにヨロシク～

ナンシー関

星海社

321

SEIKAISHA SHINSHO

目次

I

Big! Great! 永ちゃんライブ　平成3年10月4日　山梨県立県民文化ホール「矢沢永吉コンサート」　9

絵本の館クレヨンハウス　平成3年10月27日　北青山クレヨンハウス　17

ヘビー・デューティ万歳　平成3年11月29日　神保町さかいやスポーツ　25

『男はつらいよ』と幻の庶民　平成3年12月23日　浅草松竹劇場　33

劇団ひまわりの子役たち　平成4年1月26日午前9時　恵比寿西『劇団ひまわり』　41

「笑っていいとも！」お昼休みの魔術　平成4年3月6日正午　スタジオアルタ「笑っていいとも！」公開生放送　49

ゾロ目マニアを探せ！　平成4年4月4日4時44分　JR四ツ谷駅　57

熱狂！　ウィーン少年合唱団　平成4年5月8日午後6時　サントリーホール「ウィーン少年合唱団来日公演」　66

キックの鬼を崇る面々　平成4年5月30日午後6時30分　後楽園ホール　「全日本キックボクシング'92 第3戦One Truth 3rd」　74

愛と幻想の宝くじ抽選会　平成4年6月19日午前11時40分　新宿コマ劇場　「第302回ドリームジャンボ宝くじ抽選会」　82

NHKの守り神は誰だ　平成4年8月3日午後1時50分　渋谷区神南・NHK見学者コース　91

突撃！ ウルトラクイズ　平成4年8月9日午前7時　東京ドーム　「アメリカ横断ウルトラクイズ」予選会場　100

当たれ！ 公団建て売り抽選　平成4年9月20日　埼玉県松伏町・松伏ニュータウン現地見学会場　109

Ⅱ

非一流大学入試合格者発表　平成5年3月9日　某私立大学体育館　119

幻の毒蝮ラジオ公開放送　平成5年4月13日　スーパーかわしま練馬本店2F　TBSラジオ「東食ミュージックプレゼント」公開生放送特設会場　126

ドッグショー。トップブリーダーの謎　平成5年4月30日　東京晴海・東京国際見本市会場　「アジアインターナショナルドッグショー」　133

御成婚パレードの人波にもまれて　平成5年6月9日　半蔵門あたりのパレード沿道　140

謎が謎を呼ぶ、斎藤忠光とは!?　平成5年7月15日　大井町きゅりあんホール「斎藤忠光・ピアノインプロヴィゼーション」コンサート　147

夢の架け橋レインボーブリッジ開通　平成5年8月26日　芝浦レインボーブリッジ・オープニングセレモニー　154

テレフォンショッピング・ショールーム探訪　平成5年10月7日　二光ショールーム&日本文化センター　161

発明一匹狼たちの梁山泊　平成5年11月5日　新大久保「発明学会」　168

正月、初売り、福袋　平成6年1月3日　渋谷東急百貨店・本店8F特設福袋売り場　175

古き良き行列　平成6年1月15日　東銀座歌舞伎座前・特設前売券発売所　182

高級花「らん」の夢と現　平成6年2月27日　東京ドーム「世界らん展日本大賞94」　189

そして、まだ見ぬすっとこどっこい——あとがきにかえて　196

I

Big! Great! 永ちゃんライブ

平成3年10月4日
山梨県立県民文化ホール「矢沢永吉コンサート」

何かを盲目的に信じている人にはスキがある。自分の状態が見えていないからだ。しかし、その信じる人たちの多くは、日常生活において、そのスキをさらけ出すことを自己抑制し、バランスを保っている。だが、自己抑制のタガを外してしまう時と場所がある。それは、同じものを信じる〝同志〟が一堂に会する場所に来た時だろう。全員が同じスキを持っているという安心感が、彼らを無防備にさせる。日常生活では意識的に保とうとしなければ「傾いている」と世間から非難される彼らのバランスも、その場ではその「傾いたまま」の状態で「正」であるという解放感。肩の荷をおろしたように無防備に解放されるのである。

こういった「お楽しみのところ」に、大変恐縮ではあるが、私が潜入させていただく、

というのが主旨である。そこには日常生活とは別のパラダイムが存在するはずである、という予測のもと、彼らの信仰の現場の喜怒哀楽、悲喜こもごもをお伝えできたら幸いと思っている。

気合いの入った人たちが結集！

さて、そんなこんなの記念すべき第1回目の現場は、「矢沢永吉のコンサート会場」だ。これは、しょっぱなにふさわしい大ネタであるとともに、主旨を理解していただくのにも非常にわかりやすい物件である。当然の選択、ワンアンドオンリーだ。

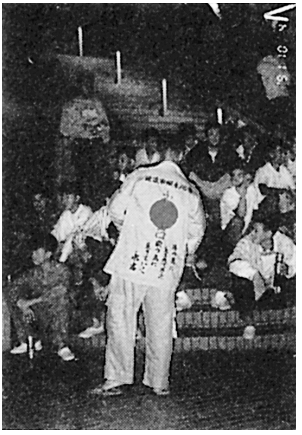
矢沢永吉を信じる者たちが心のタガを外して集(つど)う現場。それも、今回私が潜入したのはごていねいにも山梨県民文化ホールでのコンサートだ。何がごていねいなんだかわからないが。私は天皇が死んだ時も戦争が始まった時も、家の中で消しゴムを彫っていた人間である。3日や4日、一歩も外へ出ないことが珍しくない人間である。そんな私が「あずさ23号」なんて電車に乗って山梨へ行くということは、毎日電車に乗ることが当たり前の生

キアイの入った永ちゃん信者。
これから始まる年に一度の接見
に顔もほころぶ。いい人たちだ。

活をしている人には考え及ばないほどの大事（おおごと）である。私自身、一生のうちで「あずさ○号」と名乗る電車に乗ることなどよもやあるまい、とさえ思っていた。しかし、「山梨県民文化ホール・矢沢永吉コンサート」は、そんな私をも駆（か）りたてる何かに満ちていた。そこには、矢沢と矢沢を信じる人々が私を待っているはずだ。

東京駅から1時間半で甲府駅に到着。時間は5時半、もう現場では開場が始まる頃だ。私たち（私と担当編集者）は駅前からタクシーに乗り県民文化ホールを目指した。

大通りからはずれた住宅街の中にあるホールが見え始めた瞬間、私は1時間半の長旅の疲れもふっ飛んだような気がした。何故ならホールの周辺に数台のパトカーがいるのである。来たかいがあった。タクシーから降りてみて分かったのだが、別に何のもめごともないのにパトカーはとりあえずいたのである。赤い回転灯をくるくると回しながら。それはまるで、矢沢永吉のコンサート会場にはパトカーがよく似合う、という様式美を体現するためにそこに存在しているかのようである。野音のキャロル解散コンサートの熱が時を超えてよみがえるよ



すでに開場しているのに建物の外にたむろする若者。開演 15 分前ぐらいになると中へ入り席に着き「コール合戦」が始まる。

うだ。

山梨県民文化ホールは建物の中に施設全体が組み込まれているので、開場を建物の中に入って待つことができるようになっている。しかし、もう開場時間だというのに建物の外にたくさんの人が。その多くは、数人で揃(そろ)いの制服を着ていたり、祭りばんてんのようなものを着ていたりする、いわゆる「気合いの入った」人たちである。ま、現在の矢沢のコンサートの客というのは、半分以上7割がたごく普通の人なんだけど。しかし、あの子たちはその気合いのあまり「ロビーで並んで待ってなんかいられねぇよ」という「祭りの前」状態なのであろう。「気合い」と「待ち焦がれる気持ち」が正比例することは否定できない。

矢沢至上主義のレトリックなのか

建物の入口を入ろうとする。矢沢ルック（ストレートなシルエットの上着にタックのたくさん入ったパンツ、中は白のタンクトップか素肌、といった最近の永ちゃんの定番ルックをコピーしている）の若者が配っているチラシを見て、こりゃまた驚いた。それはよくあるイベンターからの他アーチストのライブのお知らせなどではなく、「矢沢永吉御一行様」にむけてのメッセージがつづられたチラシなのであった。「矢沢永吉を通じてめぐり逢った男達のネ

ットワーク」という同志のグループが、自主的につくって配っているというこのチラシには、そのグループの中の4名の人が、矢沢および今回の山梨公演に対する思いを語っている。「大歓迎！　ＢＩＧ ＢＥＡＴ御一行様」（ＢＩＧ ＢＥＡＴはこの年のツアー名）「ようこそ！　山梨県民文化ホールへ」「40本目御苦労様です」といった、直接的な永ちゃんへのメッセージ。全文を読んでみると、「永ちゃん、今年も山梨へ来てくれてありがとう」という矢沢へのメッセージと「永ちゃんにうまい酒を飲んでもらおうぜ、みんな！」というファンにむけてのハッパ、この2つが大きな柱となっている。私はこんなチラシを見たことがない。矢沢へのメッセージを客に配ることによって、その数人の同志のメッセージを全観客からのそれにしてしまうというメカニズムが読みとれる。また、入場の際に主催者及びコンサートスタッフ側から配られた「矢沢のＬＩＶＥを最高にするためのお願い」という、会場内での注意事項が記されたチラシもまた、私が初めて見るスタイルのものであった。注意・禁止事項はありきたりであるが（でも旗やのぼりの持ち込み禁止項目アリ）、最後に「次回からもこの地区でコンサートが開催できますようにご協力下さい」の一文がある。また「矢沢永吉の権利が守られるためにも、矢沢永吉のポリシーに反する海賊商品は絶対に買わないようご協力をお願いします」というのも書いてある。

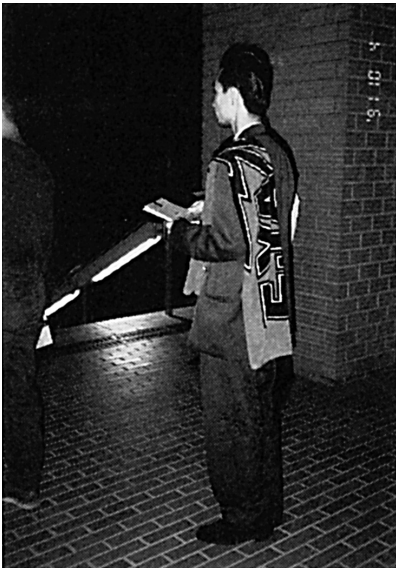
矢沢至上主義とでも言いたくなるようなこれらのレトリックは、当然レトリックだけではなく「信仰」の行動にも表れる。「いいコンサートにしたい」のは自分たちが客としていいコンサートを観たいという願望以上に、矢沢さんに気持ちよく帰っていただきたい、ということなのである。永ちゃんがライブ中のＭＣで「ホント、今日はサイコー」と言った時の客席の喜びようはすごかった。私はそこに「ああ、矢沢さんが喜んでくれて良かった」という安堵感があることを感じた。

タオル投げは絶対練習している

噂には聞いて知っていたが、矢沢永吉とあのタオルの関係は一体何なのだろう。とにかくタオルである。タオル売り場は長蛇の列。もう、タオル持ってなきゃ何も始まらないという感じだ。最初、誰もかれもまるで儀礼のようにタオルを肩に掛けている（矢沢タオルは、首にかけるのではない。左右どちらかの肩に背負うようにダラリと掛けるのが正式）ファンを見た時、生の矢沢を観ることができない間、矢沢の代りとなる御神体なのかと思えた。実際に部屋の壁にタオルを飾り、タオルに矢沢を見て暮らしている信者もいるだろう。しかし、今日のこの現場ではタオルは更なる役割を果たす。「止まらないＨａ～Ｈａ」という

曲が代表的であるが、曲の決まった部分でそれぞれのタオルを頭上に放り投げるという儀式があるのだ。私は一階最後列で観ていたが、それは壮観である。大きなバスタオルを真上に高く放るのは難しい。絶対練習している。そして、いかに高くきれいに放るかをステージ上の矢沢に見せることが、同時に自分の信仰心の深さを示すことにもなるのである。矢沢に会えなかった間ぶんの信仰心をしみこませたタオルを矢沢の目前で高く放る時、それがタオルから矢沢に帰されると信じているのかもしれない。

ステージ上の矢沢は煽動的なMCをするわけでもなく、あくまでも音楽を演っているだけだ。しかし気づいたのだが、矢沢は何度も舞台からソデへ姿を消す。曲の間奏で消えて2コーラス目が始まる瞬間に戻っては歌い出すというシーンも数回あった。矢沢本人は無意識なのだろうが、結果的にこれは無言の煽動だ。「ステージに現れる」というのは、いわば「御降誕」である。



会場付近でチラシを配る有志の方々。本文中にも書いたタオルの正式な掛け方はこのスタイル。

信ずる者たちにとっては、最も崇高でありがたい儀式を何度も見せているのである。もう会場は大変だ。

詳しくは知らないが、かなり規模の大きいファン組織で、全国に支部を持つ「永心会」というのがある、というのを私は以前ある雑誌で知った。この日も揃(そろ)いの制服で気合いが入っていたが、「永心会」はコンサートが終わったあと「反省会」をするらしい。彼らにとって矢沢のコンサートは単なる娯楽ではないことは明白だ。やっぱりそれは「信仰の現場」と呼ぶべき場なのだろう。

「ルイジアンナ」や「ウイスキー・コーク」も聴けて、タオルも3枚買って、満足して帰ってきた私であった。

絵本の館クレヨンハウス

平成3年10月27日
北青山クレヨンハウス

今月、私が潜入したのは原宿の「クレヨンハウス」である。

一般的には、絵本の専門店として知られている「クレヨンハウス」であるが、実際にも1階は内外の絵本がかなりのところまで揃っている。かなりのところってどれぐらいのところだ。そして地階へ行くとレストランがあり、2階は子供向けのおもちゃと「クレヨンハウス」の価値基準による〝かわいいもの〟が集められた売り場、「クーヨンマーケット」になっている。

ここで正直に言ってしまうが、この2階までは予想通りだったのである。今回この「クレヨンハウス」を「信仰の現場」であり得ると見込んだのは、どうも世の中には「絵本」崇拝者というか「絵本的なもの」を盲信する大人がいて、私はそういう人たちをなんか偽

善的で信用ならないと思っているというのがあったからである。ま、それは私の偏見かもしれないが、とりあえずこの「クレヨンハウス」はその「絵本崇拝者」のメッカであろうと思ったのだ。そしてそれは、地階、1階、2階までに関しては当っていた。この3フロアは「絵本的なもの」で埋めつくされていた。しかし、最上階3階へ足を踏み入れたところで、私はどんでん返しをくらうことになる。この「クレヨンハウス3階の秘密」は後に述べることにして、気をとりなおして本題に入ろう。

“メッカ”へ招き入れる絵本通りの目印。はっきり言ってその先は青山の住宅地でしかないけど。

絵本崇拝のシステム

常時5万冊を揃えているという1階の〝子どもの本の専門店〟。私が行ったのは、かなりの大雨が降っている日曜日の午前中という何となく特殊な時だったのだが、それでも店内には熱心な客が20人ぐらいうろついていた。ちなみに全員大人である。ほとんどが1人で来店しているようだ。店内はとても静かである。雑踏とかざわめきといった感じが無い。

店内は決して広くはないのであるが、真ん中あたりに白木のテーブルと椅子がどんと置かれている。じっくりと座って読んで選んでください、ということらしいが邪魔である。この日は40歳ぐらいのおばさんが1人（席は4～5人分ある）座って絵本を読んでいた。あと、床にべったりと座り込んで最下段にある絵本棚を一心不乱にチェックしていた30代半ばとおぼしき男性客が1人。

絵本が好きであることを公言する人は多い。好きな本をたずねられた時に、絵本のひとつもあげておけばブナンであるという風潮さえある。確かに優れた絵本というものが存在するであろうことは認めるが、私が思う「絵本崇拝」は「絵本がいい」ではなくて「絵本だからいい」という考え方が基本になっているように思う。こうした絵本崇拝者が信じているものは、作品自体のクオリティよりも絵本そのものに元来まとわりついているさまざまな概念にあるのではないか。「大人になっても子供の心を持ちつづける」だの「夢がある」だの「純粋」だの「心が安らぐ」だのと言った、絵本好きがその理由としてあげるところのこれらのフレーズは、必ずしも文章と絵による作品としての「その絵本」に対するものとは限らない。もう「絵本」だ、っつうだけでこれらのフレーズが頭の中をぐるぐる回っちゃっている感じもするし。あと、このような絵本派の人々が、かくも自信ありげに

何の疑いもなしに絵本を礼賛するのは、絵本に一種の踏み絵的能力があると思っているからだろう。絵本の良さが分からないのはあなた自身に問題があるからだ、てなもんである。

１９７６年に「絵本とお茶のサロン」としてオープンしたという「クレヨンハウス」が徐々に手を広げて現在のように小物を扱ったりいろんなサークル活動の拠点としての役割を果たすようになったのは、絵本好きな人の多くが「絵本的なものならば好き」というスタンスに立っていることを証明していると思う。「クレヨンハウス」にあるものは「絵本的」という公約数でくくられたものたちである。２階のグッズショップ「クーヨンマーケット」にも、絵本好きにとっての「フェイバリット・シングス」が集められている。見渡したところ鍵となるのは「白木の家具」「素焼きの植木鉢」「木製のおもちゃ」「木綿のランチョンマット」「テディベアグッズ」と見た。見事に一貫したポリシーがある。どこが見事なのか説明するのは難しいが、見事と思う心は皆さんに通じていると思う。

よく女の子は世の中を「かわいい」と「かわいくない」の２つのみで斬りながら生きて行く、と言うが、これと絵本崇拝者は似ているようで全く違う。女の子は本能で判断するが（それ以外に規準を持たない、というのもある）、絵本崇拝者は計算ずくだ。これは絵本的であるかどうかを瞬時にして判断し、認めると認めないに振り分ける。たとえばいくら好

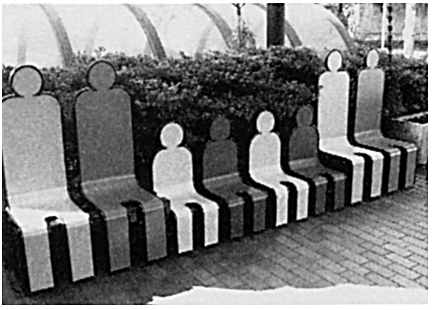
きな色形をしたものがあっても、それが環境破壊につながるプラスチック製品であれば絵本的じゃないというふうに。

クレヨンハウス3階の秘密

何だかこの店は全体的に甘ったるいニオイがする。観念的な話ではなく実際にニオウ。そんな事はどうでもいいのだが、最初にも書いたように、この2階までは案の定であった。1階から2階へ上って来たのと何ら変わらない階段でさらに3階へ上った私を待っていたものとは何だったか。

それは「フェミニズム」であった。フロア全部がフェミニズム。2階までの絵本はどこへ行ったのか、というぐらいフェミニズム。

まず、階段を上がりきった目の前の陳列棚にぎっしりと並べられたフェミニズムのミニコミ誌（紙）の大群。「おんなの叛逆」「Woman Sprit鎖をはずせ」「証言・セクシャルハラスメント」などといったタイトルのミニコミ誌が、まるで行く手をはばむかのように立ちはだかっ



入口で待ち構えるコケティッシュな椅子たち。
もはやファンタジーの世界の一話のようだ。

ている。もしかしたら、ここで2階に引き返す人もいるかもしれない。このミニコミの前を通ることができた人だけが、さらに奥の「フェミニズムの部屋」に駒を進めることができるのだ。私は取材だ。奥に進まねばならない。右に折れるとフロア全体が見渡せる。置いてあるのは本だけである。しかし、それは「女性に関する本」のみだ。

各本棚には手書きの分類項目が貼られてある。これを列挙するのが、ここの雰囲気を一番わかってもらえると思う。「フェミニズムの現在」「女性と仕事」「自分を生きる」「新しい関係・結婚を考える」「日本女性史」。こんなのがフロアじゅうぎっしりだ。マンガのコーナーもあったが、マンガとはいえ一筋縄ではいかない。仰々しくも「選書協力・小迫倫子さん」なんてただし書きがしてあって、いの一番に並んでいたのが「「有害」コミック問題を考える」というマンガじゃない本であった。そしてここにもまたフロアの真ん中に、ウッディなテイストの大テーブルがどんと置かれている。こんな四方をフェミニズムで囲まれたここで、どんな人たちが何を語り合うのかを考えると、「絵本もいやだけど、とりあえず2階に降りようかな」という気になる。

2階までが「絵本的なものなら何でも来い」だったように、この3階は「フェミニズムなものなら何でも来い」である。何か極端だよなあ、バランス悪い。いちおう、そんな本

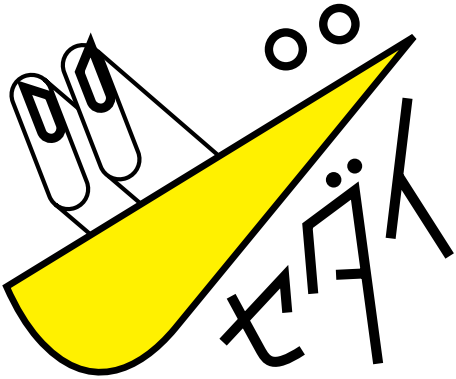
棚の間を歩きながらネタ用のメモをとってたりしたわけだが、ハタから見たら私は単なる熱心なフェミニズムに興味がある人に見えたかと思うとどうしようかと思うが、他に人はいなかったからいいか。フェミニズム自体を否定したりする気は毛頭無いが、このような「フェミニズムの実践」の形を目のあたりにするとどうしても引いてしまう。〝徹底する〟ことは重要なのかもしれないが、やはりどうしてもバランスの悪さがひっかかるのだ。いつも思うが「運動」として「下手な見せ方」をしている。「上手く取り込む」ことが勝ちだろうと思うのは、やはり素人考えなんだろうか。

フェミニズムに関するうんぬんは、今日のところ置いておくとして、この「クレヨンハウス」は巨大な罠ではないのか。

若い女の子の絶対規準「かわいい」は、その中・高校時代においてどうしても「絵本的なもの」に重なってしまいがちである。その点で女子中・高生をせめることはできない。

1階の絵本に近づいて来た女の子を2階の「かわいいもの」で安心させ、3階でパクリといく。フェミニズムの意味もまだ知らないいたいけな少女を、まさに「おびきよせる」ように3階の「全てがフェミニズムな場所」に誘導する。この建物がそういう構造になっていることは客観的事実だ。あ、これぞ「上手く取り込む」の実践なのか!?

このフェミニズムのフロアは、「ミズ・クレヨンハウス」つうんだってよ。
「ミズ・クレヨンハウスにようこそ。わたしたちひとりひとりが、自分を生きるＨｅｒｔｏｒｙの主人公――どうのこうの以下省略」（傍点筆者）
なんか「ようこそ」というさわやかな言葉なのに、ニタリと笑って舌なめずりをする山ん婆（ばば）みたいなものを連想してしまって反省している私だ。
言い忘れたが「クレヨンハウス」の創始者は落合恵子（おちあいけいこ）さんである。レモンちゃんなんて呼ばれて若者のオナペットだった氏が、いつの間にかフェミニズムの担い手になっていたその経緯は、何となくこの「クレヨンハウス」を1階、2階、そして3階と昇っていくのに似ている。恐るべし「クレヨンハウス」。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!